つながりを生む 新婦人カフェ

もやもやを話そう

鹿児島支部西谷山班　木下加奈

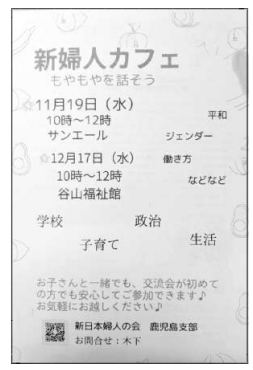
もやもやを話せる「新婦人カフェ」が次世代と先輩世代をつなぐ。第32回全国大会の発言に加筆し、紹介します。

何でも話せる場を

私の班は、子育て世代と大先輩が半々という構成です。班会を開こうとしても都合が合わず、継続しづらいという悩みがありました。そこで、全国のとりくみを参考に「オンラインしんぶん読む会」を始めてみましたが、忘れてしまったり参加者がいなかったりと、うまく続きませんでした。もともと私は、オンラインよりも、顔を合わせて話す場のほうが好きです。「やっぱりリアルで集まりたい。カフェのように何でも話せる場をつくりたい」とずっと思っていました。

新婦人カフェで、しんぶんを読み合って

支部には「子どもと教育部」と「ジェンダー部」があり、それぞれでカフェを開いていました。学校カフェでは、「先生が忙しくて子どもが話しかけられない」「児童発達支援の療育が有料化され不安。必要なのに受けられなくなるのでは」という切実な声が上がりました。また、ジェンダーカフェでは、「生理用品をトイレットペーパーのように個室に置くのは女性の人権を守ること。鹿児島でも広めたいよね」など、集まればいろんな話題で盛り上がるのですが、企画が不定期だったり、同じ月に複数のカフェを開くのは負担が大きいという課題もありました。また、「新婦人を広く知らせたいけれど方法が分からない」などの声もありました。



カフェのチラシ

まずは気軽に来て！

そこで、「学校もジェンダーも一緒に話せる場にしよう」「新婦人を知ってもらおう」「チラシにはテーマを幅広く載せて、〝もやもやを話そう〟と呼びかけよう」と、支部主催の「もやもやを話そう新婦人カフェ」を立ち上げて、新しいチラシを作成しました。

おいしいお菓子とコーヒー、それに新婦人しんぶんがあれば十分。準備する側も気負わず、「まずは気軽にきて話そう」と声かけを広げています。

カフェは毎月1回、平日午前中に開き、市内中心部と南部の会場を交互に設定して、参加しやすさを工夫しています。また、チラシには2カ月先までの予定を知らせています。

「学校の先生がもっと増えてほしいよね」「保育園に入れるか不安」など毎回、時間いっぱいおしゃべりが弾みます。

「五つの目的」を大切に

ある日、「今日は誰もこないかな」と思っていたところ、「たまたま休みだったから」と働くママがきてくれました。

「ウクライナやガザの戦争が怖くて、自分に何ができるかずっと考えている」と話され、その真剣な思いに胸を打たれました。そこで思い切って「支部委員をしない？」と声をかけると「いいよ！」と即答。続けて「常任も一緒にどう？」と聞くと、これも「いいよ！」と快く引き受けてくれました。思わず心の中で「やったー！」と叫ぶほどうれしい瞬間でした。

先輩世代が参加してくださると、若い世代とは違うもやもやが語られます。しかし、しんぶんを囲んで話していると、平和を願い、「五つの目的」を大切にしたいという根っこは同じだと再確認できます。「こようか迷ったけど、きてよかった」と言ってもらって、逆に私が元気をもらうことも多いです。新婦人カフェが、次世代と先輩をつなぐ貴重な交流の場に育ってきていると感じています。

主張

「情勢と社会を変えるのは私たちの声と行動、仲間づくり」―第32回全国大会は高市自民・維新連立政権が発足するという激動の情勢のもとで開かれました。大軍拡や医療費削減などをすすめ、物価高には無策で、ジェンダー平等を妨害する政権に不安が広がるなか、「こんなときこそ新婦人を大きく」と、大会めざす1カ月で5100人を超える仲間を迎えました。

都道府県本部大会の成功へ、引き続き新婦人を語る行動がとりくまれ、「ジェンダーや平和のことを話したい」「国会行動に参加したい」と入会しています。

新しく迎えた会員のみなさんに「会のあらまし」を渡し、班会や歓迎会を開き、大会報道号（11月15日号）、全国大会のオープニングや発言の動画を見て新婦人の活動や歴史を学びましょう。会費の使われ方が載った会費納入袋も使い、会費が新婦人のさまざまな活動に生かされていることを伝え、しんぶんの配達・集金なども相談しましょう。

一人ひとりの仲間と心通わせ 財政活動の促進を

班会や小組例会に参加できない会員とも訪問や電話、SNSなどでゆるやかにつながり、会員一人ひとりの要求と条件を大切に近況や要望を聞くなど、心通わせた活動と会費・しんぶん代の納入をすすめましょう。

今年も集中豪雨や大規模火災などの災害が多発し、各地に甚大な被害をもたらしています。全国から寄せられた救援募金は被災自治体に、救援基金は被災された会員・読者に届けました。冬を迎え、温かな年末とお正月を迎えられるよう、引き続き救援募金・基金にとりくみましょう。

聞き書き

母の歴史

3074

大分県　諫元正枝さんのお話　（3）

帰国後、義父母の実家に戻っての生活は、母の苦労の始まりでした。祖父母は育児にかかわろうとせず、母は子育て、家事のすべてと農業にと働き続けました。

母は再婚話にも耳をかさず、村の奉仕作業にも参加しましたが、当時の村では女性の参加は一人前と認めず、1日分の2分の1を〝出不足〟として上納する決まりになっていました。あまりの不合理さに〝同じ思いの人たちと相談し、是正させた〟と話していました。

祖父母の高齢化と病気で、農業は母の手一つになり、わが家の暮らしも厳しくなってきました。牛を飼おうと姉と私で相談し、離乳後の雄のべべ（牛の子）を5千円で買ってもらいました。朝早く起きて姉は牛の草刈り、母は畑仕事、私は朝食の準備と分担して働く、そんな生活が5年くらい続きました。

編みものが好きだった母（80代）。自作の帽子とジャケットを着て

戦局がいよいよ厳しくなり、小倉工廠（こうしょう）の兵器工場が家から近い秋山の谷あいに移転してきて、従業員と家族の宿舎が上手町（のぼてまち）全世帯に割り当てられました。わが家には、廊下つきの座敷一間に10人家族、2階に管理職の夫婦と2家族が割り当てられました。

1945年、終戦の年の7月に祖母が、8月6日に祖父が病気で死亡、私は小学4年生、姉は女学校1年生でした。がんばって協力してきた国債が一片の紙キレになったと、母が落胆していた姿を思い起こします。

つづく